特111
98

泉

第一輯

泉會

始

特111
98

泉

第二輯

—1922—

惡德……米山可津味 (一)
悔い……豊田利生
老人が雞を見てゐる話……松村茂 (三)

大正
11. 2. 25
泉
食内
編

惡徳

米山可津咏

「今夜も亦終列車かなあ。」暫らく續いた不快な沈默の後に水澤が、小さな身體を搖ぶつて、突拍子もなく大きな聲を出した。同僚の藤原も香川も默つて答へない。軒に積つた雪が、時々北風に吹き浚はれて、箒で掃くやうにサラ〳〵と硝子窓をかすめてゐた。

不氣味な沈默が、又一としきり皆の間に續いた。

かん〳〵起つた居爐裏の火は周圍の人達の顏を茫と紅く染めてゐる。冷たくなつた酒饅頭を、火箸に載せて燒いてゐた配達小僧の中村が、折角燒いたのを先刻も香川に失敬されたので、別の隅で燒いてゐたが、恰度狐色に燒けたところで、

今度は藤原にやられて終つた。

「駄目だなあ、人が折角燒いたのを、皆で掻浚ふんだもの。」

藤原はくつくつと笑ひ乍ら、「そら、」といつて半分割つてやると、中村は一と口に頬張つた。他の者達は可笑しくもないと見えて相變らず微笑さへもしない。

「非道い雪ですねえ。……。今晩は。」

上り框の障子を明けて配達の奥村が顔を出した。見ると外套の頭巾から肩へかけて粉雪が白く戴つかつてゐた。とたんに冷りとする風が部屋に入つて來た。炭火の焔がゆら〳〵と動いた。

「やあ御苦勞さん。非道い雪だらうね戸外は。餘り降つてゐないやうだが吹き下ろされるんで……。まあ上り給へ。今晩も遲れちまつたんだ。斯う吹くやうぢやひつよとすると汽車が不通になりやしないかと思つてゐるんだがね。(間)あ、奥村君、君濟まないが停車場へ電話をかけて聞いてみて呉れないかなあ、汽車が通じてゐるかどうかつて……。立つたものなら親でも使へつて云ふからね。ハッハッ……。夫れからゆつくり暖つて呉れないかね。」水澤は斯う云つて又、左の肩を鳥渡と武張らして一と揺り揺り、側にあつた冷たい酒饅頭に手を出し乍ら、

「いやあ、酒饅頭も冷えると不味いなあ。」と、云つた。

誰れもまだ何んとも返事をしなかつた。乾き切つた雪が、廂の邊りで、逆斗打つて吹きまくつてる戸外の有樣でも眤つと想像してゐるかの如に。

奥村は電話を掛けに隣りの雜貨店に行つた。

彼の言葉に從へば、奥村も舊とは此の○市でも有數の呉服屋だつたが、或る流行つ妓と馴染んでから家財をすつかり擦り潰し、續いた日清戰爭の後を受けた不景氣でもうだつも上らぬやうになり、現在では裏店に女房と年の割に小さな子

供ばかりある五人の世帶の口を養ふに、跛を曳き〳〵晝は香油の行商に、夜は夕刊の配達をして生活の糧にしてゐるのであつた。

「奥村さんが一と廻り配達して來ると、夏なんぞは夜が明けるからなあ。俺よりも區域が少ない癖に大丈夫三時間は違ふね。」今年十五になつた中村が、一つは手柄話しにして始終斯う云つては笑ひ笑ひするのであつた。尤も、此んな小つぽけな新聞支局に、働らきのある男の來る筈もなく、で、仕方なしに、集金や何かで中村ではいかない場合もあるので跛の奥村を置いてゐるのである。

「中村みたいにずるをきめて配達しなけりやいくらだつて早く出來るさ。」藤原の言葉の言ひ切らぬ中、遮る如に、

「だつて、あの時は腹が痛くつて辻も歩るけなかつたんだもの。」

「ちよい〳〵腹が痛くなるだらう。雪が降つたり、寒くなつたりするとなあ。」藤原は尚ほも追擊すると横合から水澤が、

「中村は疝氣なんだよ、ハッハッ……。」

と、大きな聲で笑つた。皆が初めて可笑し相に笑ひ出した。

「いやあ疝氣なのは豈中村のみならんやさ。H新聞が疝氣の慢性に罹つてゐるんだ。今夜の狀だつてやつぱり持病が起きて遲れてゐるのさ。餘命幾何もなしぢやないかねえ。」

香川が、皆のさわつてならない話題に觸つたので、話しは又一と區切り區切られた。

H新聞のO支局では、粉雪の飛びしきる夜を斯うして新聞の着くのを皆して待つてゐるのであつた。

一體H新聞といふのは、嘗つては某政黨の此の地方の機關紙であり、社長が與黨代議士であつた關係上、所謂吾黨内閣の時代には可成りな勢力もあり、羽振りも餘程きいてゐた方であつたが、内閣が更迭され、社長も代議士候補に見事落選

してからといふものは全く萎微沈滯して終つて紙屑同樣な新聞になつて昔日の面影も何處へやら、一臺の輪轉機さへ借金の抵當に入り、それも今日明日の中に差押へられ、卷取りの需要も圓滑に充たすわけにいかないといふ惨めな破目に陷ちてゐた。從つて腕の少しある記者は、（といつても、斯うした土地に來てゐる人は大抵内地を食ひ荒した性質の良くない惡德記者で、殊更此の新聞はそうした人が多かつたやうである。）次第に見切りを附けて退社し、僅かに、まごついてゐる人達に依つて、――しかも半分は逃げ腰の――、喘ぎ〳〵仕事を續けてゐるといふ果敢ない有樣であつた。

斯うした本社の支局だけに、O支局の内狀と來ては實に見窄らしいもので、支局長の位置にある水澤も、ろくに記事を書けるではなく、受持ちの官公衙廻りを一向に怠けてするではなく、只管に廣告料を集める算段に頭を費し、やつと入つてくる金で、今は殆んど本社と獨立した會計で支局を維持し、支局の外觀の面目だけを辛うじて保つてゐるにすぎないのであつた。蘭原は此の二三ヶ月といふもの給料がお定りの額さへ當らないので、不貞腐れて毎日家にごろ〳〵寢轉んでゐるし、配達の中村や、奥村やも、折々は休んで終つたり、滿足に配達をしなかつたりするのを、水澤はどうする事も出來なかつた。唯、香川だけが獨り眞面目に、しかも記事を書く面白さに釣り込まれて支局の記事の方は全部擔當してやつてるたにすぎなかつた。いはゞ香川の記事だけが本社と支局の聯絡を繼いでゐる唯一つの鎖なのである。

水澤も愈々困り拔いて來た時、思案に餘り、O市の清酒人氣投票などといふ苦策を案じ出し、部數を少しでも多くして收入の道を計らうと企てた。が、失れは最う、五百から四百、四百から三百と、有價紙がぐん〳〵と減りかけ、二百五十とは上れつこのない頃なので、折角の妙案も此んな微力な、しかも、少し注意して見さへすれば、誰れの眼にも明らかに風前の燈然とした新聞紙の人氣投票など

にわざ〳〵肩を入れる算盤知らずもゐないので、水澤一人が一生懸命に力んでみても到底ものにはならないらしかつた。

彼は自分のやり出した事なので、投票用紙を獨りで切り拔いては色々な清酒の投票をやつて景氣をあほつてゐるといふ滑稽な、然し慘めな樣を呈してゐる、甚しい時には內輪の吾々にさへ隱して、二百や三百の投票數を胡魔化して本社へ報告したり、本社へ行つて來た時などは、賞品として褒狀と、金看板と、金牌を贈ることに決定したとかいふて、嘘か誠か吹聽したりする割に、少しも紙數が殖えぬのは寧ろ減び逝く哀れさを徒らに喜劇化するもの、やうで悲慘な氣もされるのであつた。新聞の記事も糊と鋏で細工される事が一層露骨になつて來た頃には、H新聞が夕刊新聞なのを幸に、東京電報しら其の土地の朝刊新聞から切り拔くやうになつてゐた。

「おい、水澤君、今度一つお妾探險つてのをやらかさうぢやないか。O市の上流階級を大いに退治してやるんだ。」

炬燵の中に寢轉んでばかりゐた藤原が、或晩此んな事を突然云ひ出して這ひずり出て來た。一座の者の顏には搔つたい、晴れやかさがふいと漾つた。

「いやあそいつあ素敵に面白いぞ。是非やらう。隨分出て來るぞ。僕の知つてるのだけでも十や二十は大丈夫ある。やらう、やらう、今夜からでも早速探險に出かけるか。藤原君らしい新發明だなあ、ハッハッ……。」

水澤は千人の味方を得たやうに喜んで終つて斯う云ふた。

此の話しのあつた二三日あとからは、ぞく〳〵と材料が湧いて來て、香川は專ら得意の筆を奮ふといふことになつた。

藤原の此の思ひ附きは、記事としての面白さなどよりも、無論、不淨な金を手に入れたいからの動機だ事は、人の善くない彼の平常からでも知られるので、

「此の野郎を詳しく調べて三日位連續して載せると大抵何んとか言つて來るぜ。」

と、或紳士の材料を握つて獨り悦に入つてゐたが、果せる哉、一日載つただけで、或る料理屋から使で迎えに來て、彼は北叟笑んで出て行つたりした。そして折角、材料が面白いので、腕に撚をかけて書いてた香川の記事が二日目から掲載されなくなつて失望させたりした。

香川はそうした事が二度三度とあるに伴れて、人の淺猿しさを如實に見せらるゝ心苦しさと、今迄知らなかつた世間といふものを數へられ、それを少しづゝ肯う心さへ起つて來てゐる自分を怒じた。

香川は〇支局の客員のやうな仕事をしてゐるといふものの、未だ、やつと今年の三月に中學を卒業する少年にすぎなかつた。彼は、亡き父の少しばかりの年金と、母の針仕事から上る僅かの金と、間貸しをしてゐる上り高とで生計を立てゝゐる一家の苦衷を察して、彼が作文が上手であり、先天的に鋭い觀察力を備へてゐるところからして六ケ月前程から此處に入つて、主に、運動、演藝、教育の方面の記事を書いて、給料としてよりは原稿料として少しづゝ貰つては小遣の足しにしてゐたのであつた。しかも、その金さへ近頃は滿足に呉れないので、藤原や水澤やが密々と囁き合つては惡辣な金を持つてくるらしいのを見、聞きして、秘かに義憤を感じてゐたのだが、そうした惡辣な手段にも、胸のときめきと、羨望とが折々に感じないわけにいかなくなつてゐた。

別收入を見附けた水澤は、清酒人氣投票などといふ、勞多くして功少ない馬鹿正直な事に以前程は油が乘らなくなつてゐた。が、滿更捨てさる事もならず、用紙を切り拔いては相變らず投票をやつてゐたが、近頃では投票の興味よりも、恰度今夜も夕飯の天丼と、酒饅頭に變つたやうに、切り拔かれた新聞が押入れに堆高く積まれて、時々紙屑屋に賣り拂つて金に代はる興味の方が强かつた。

電話をかけに行つた奥村も歸つて來て、今夜は愈々本社の積み遲れと解つたので、皆は又た一としきり腰が落着いた。が、香川だけは心の中で、ほつとした。

といふのは斯ういふわけなのである。

夫れは、水澤にしても、藤原にしても、お妾探險をやり出してから時々金廻りがよくなるのを見てゐると、善くない事であり、心から忌むべき事だと十分感じてゐた香川であり乍ら、自分が手先きに使はれて、甘い汁ばかりを吸はれてゐるのが、如何にもお人がよすぎるやうであり、又、他人から何かしら子供扱ひにされてゐるやうな不本意から脱したい心と、更に其うした濁つた環境に近頃は少しづゝ馴致されかゝつて來た彼であるのとで、彼の遠い親戚に當る家の外妾を中心にした家庭の經緯を記事にして送り、そして幾分なりとも金を得やうと思つたのであつた。で、記事を書いた當人は香川であるが、直接な責任は藤原が持つといふ具合に役割迄もきめてゐた。

「藤原さん、僕は今度斯んな記事を書くんだが萬事の折衝を受持つてくれませんか。」と、いふて記事の内容や、簡單に事情を打ち明けると、無論藤原のことであるから、

「よし、大丈夫引き受けた。やり給へ。その代り『儲けは山分けだぞ。』」

などど、お終への方は冗談めいた、然し本音を出して言葉を濁してゐた。

書かうか書くまいか、と樣々に思ひ惑つてゐたのが、『う打ち明けて終ふと、もう退引きならないと心に決めて書き初めたのであつた。今度『のやうに他人が集めた材料を書き綴るのと異つて、自分で内狀をよく知つてゐる事で『あるしするので假名をあて、書いてゐる中に、それは又非道く面白い活劇風なものに『なつて來て、獨り乘り氣になり、先づ第一回目を一段半も書いて了つた。

――此れでよし、あの家のことだから必然取消しが來て、次回から掲載中止の手紙が來るに違ひない。」と、始めの中は何かしら、大きな罪惡を犯してゐるやうに底氣味の悪るがつてゐたのも、面白い程進む筆を讀者に示す興味の方が遙か强くなつてゐた。とは云ふものの社の鼠色の封筒に封じ込んで發送した後で、そう

した奥書から稍躊めかけて來ると、少しづゝ又悔ゆる心が遂に頭を擡げ出して暗らい心にさせるのであつた。が、今となつてはと、彼の心を彼自身遮二無二にまた「惡」の方を抑へつけたりなどした。しかも、そうした記事の一番奥には、鄭て入つて來るであらう黄金の光りが或時は大きく、又或時は比較的小さく輝いてるるやうに考へる、滿更、徒らに後悔ばかりもしてるるべきではないと、獨り悅に入るのであつた。

その夜の歸り途、雪は降つてるないが、冷たく痛い風を避け避けして彼は、兎もすれば起り勝ちな自責の心と、又、時とすれば嬉しい事が待ち設けてる相な、執念深い二つの心の陸離に一種名狀し難い呆けた氣分を味はされて歩るいてるた耳殼は寒さの爲め剛ばつて痛い。顏の毛孔一つ一つに寒さがシク〳〵と刺る夜である。一陣の風がやつて來ては軒の雪を拂ひ落して辻電燈をその中にぼうと包んだ。斯うした第二第三の辻電燈を見た彼のマントの肩は、白く粉でも撒き散らされたやうにされた。硝子戸を閉め切つて、來るともない客を待つてるる商店の燈りが、今通つたばかりの馬橇の二條の跡をテカ〳〵に照らしてるた。威勢のいゝ、そして何處か慌しい響きをもつた馬の鈴音がシャン〳〵〳〵と鳴りながら遠のいていく。冬の夜の空は果てしなく高く見えるかと思ふと、又、直ぐ頭の上に蔽ひ冠さつてきてるるやうにも見えた。

斯うして現なく歩るいてる中に彼は何故か自分獨りが此の世に取り殘されでもしたやうな氣分がされるのであつた。

――成らう事なら此の儘雪の中に倒れて眠るやうに死んでいきたい。と、泌々身の孤獨を感ずるのであつた。すると、彼は今夜書いて送つた原稿が、刑事問題を惹き起して獄に繫がれる事になり、獨房に端然と座つてるる自分自身の姿がまざ〳〵と眼の前に描かれるのであつた。

――いつそ、そうなつてくれ、そうなつて俺は本統に孤獨を感じてみたい。そ

して其處に本統の生き甲斐を見付けたいのだ。僞善も謀略も何にもない赤裸な自分自身を感じてみたい。」と、興奮し切つて彼は斯う強く自分自身に言つてみた。だが。彼は、自分の成長を唯一の樂しみに暮らしてゐる母親を思ふと、遂にその勢も、ぐんなりと挫かれて終ふのであつた。

樣々な妄想に耽り乍ら歩いてゐる中に、何時の間にか彼がよく水澤に伴れられて來たレストラントの前に來てゐた。二階から階下から、今、自分の立つてゐる所と全るで別な世界の如な温かく樂しい、そして又、今自分の歸りつゝある貧しい母親一人が待つてゐる佗住居とは似も似つかない其のレストラントの光りを見て、今夜に限つて彼は迚も見逃せない氣がした。

彼はいきなりドアを押して勢込んで中へ入つて、ストーブの側へ腰を下ろした、不意の闖入者に皆はけげんな眼をしてゐたが、頑丈な身體を青い服に包み、白い襟卷だけを首に卷きつけた水夫が、醉ひしれて不活潑になつた頬の筋肉をだらしなくゆがめて、

「君、ねえ君、どうです一杯。」と、盃を、節くれ立つた手に掴んで彼に差し出した。

「ねえ君、此んな凍れる夜なんざあ一體全體船へ歸つて寢られるもんけえ。ねえ君、そうだらう。考へてみたつて解るさ。此ちとらだつて人間樣の皮を冠つてゐる日にや、血も通つてゐれば神經も皆樣同樣にあるときてゐるからたまらないさ。こう、ねえ君、若い女と二人で温まつて寢てえと來るさ、なあ君、どうだ、そうだらう……？」呂律も餘程廻らなくなつて同じ如な淫らな言葉が繰り返して言はれた。

「全くですね。馬鹿に寒い夜ですね。」

彼は斯う答へたが、又暫らくして云つた。

「だがあなた達は本統に幸福ですよ。何にも拘束されないで自然らしい生活を送

る事が出來るんですからね。」

見ると水夫は、彼に差した盃を側のテーブルに置いたまゝ、ぐつたりと俯伏しになつてゐた。

間もなく其處から歸途に就いた彼は、凍りついて建て附けが悪るくなつてゐる表戸を開けると、母は十燭の薄暗らい電燈を眼のところまで下げて一生懸命に針仕事をしてゐた。

何氣なく裝つて、

「寒い寒い。今夜は馬鹿に凍れる。」などと云ひ、今レストラントで飲んだ酒の醉を氣附かれまいとして直ぐに次の間へ入つて、行火に温められてゐる寢床へもぐり込み、夜具をかぶつて寢た。心臓がドキン〳〵と、太鼓を叩く如に、早く、遲く、高く、低く亂調子に鳴つた。呼吸が苦しくなつて來ると、時々そうと夜具の中から顔をもたげて深呼吸をした。次第に譯もなく涙ぐましい心に獨りでになつていつた。

「濟まない、濟まない。お母さん許して下さい。何うぞ許して下さい。私が出世をして必ずお母さんを樂な目に合はしてあげますから。」何のことか自才でも解らないが、唯々彼は斯うして、胸のところに掌を組んで母に謝つて見ねばならなかつた。又しても湯のやうな涙がぽつ〳〵と止め度なく流れ出た。そうつと顔を上けて時の經つのを知らぬ氣に、此の寒い夜を一心に仕事に精を出してゐる母を見て、

「お母さん、今晩は隨分寒いから最う寢てはどう。」と、聲をかけた。

「あい、もう寢るよ。行火は温かかつたかえ。」

隣りに間を借りてゐる夫婦者の寢息が、心安さうにすう〳〵と洩れて來た。彼は又しても譯もなく涙が一と切り頬と鼻に流れ落ちた。

斯うした夜の二日あとの今夜なのである。若し特別重大な記事でもあつて、紙

面が輻輳してない限り、愈々今夜の夕刊に載せる筈になつてゐるのが生憎と發送が遅れたといふ今の奥村の電話の返事なので、香川は稍ほつとしたが、張り合い、抜けの氣味がないでもなかつた。又、氣掛りな事が先きへ延びた氣詰りも感ずるのであつた。

「ぢや僕は失敬するから、今夜は又馬鹿に寒いしするので。」

水澤が、「未だ御馳走をするからもつと遊んで行き給へ。」と、引きとめるのも、彼は苛々してゐる今の場合なので、たつて歸ることにした。歸りがけに彼は藤原を上り框のとこに寄んで、もう一度

「例の記事が載つたら忘れないで新聞を一枚あの家へ送つてくれ給へね。尤も中村に配達させてもいいんだが。」と、念を押し立聞を出た。心の底からぞく〳〵と身顫するのを彼は感じた。

雪は粉雪らず風に翻弄されて毬のやうに其處らぢうを轉け廻つてゐた。

彼は路々、母が何に氣なく裝つて、自分の學用品や、小遣を不自由なく與れて可愛がつてくれてゐるが、現在の自分の家の收入では容易な事でないのを遂うに感じてゐたので意を決して友人の紹介でO支局に手傳に入つたのは六ケ月前であつた事を思ひ出した。そして猶ほも、其の仕事が次第に面白くなるにつれて學校の方がすつかり閑却されて二學期の成績はその爲めまるで駄目になつてゐた。母の前では、心配をかけまいと思つて、「卒業だから落第なんか大丈夫しませんよ。夫れに一學期が相當に出來てゐるから、三學期を少し奮張ればビリで卒業もしませんから。」と、殊更平氣を裝つて言つて見たものの、内心は迚も心配でならなかつたのであつた。そして三學期間近かの此頃なのに少しも勉強が手に附きはしない事を考へてもみた。そればかりではなく新聞社に入つてからは酒の味も煙草の味も解つて來た。カフエーのはしたない女共と戯ける事も知つた。無料なのを幸に、毎晩のやうに活動小屋や芝居に友人を誘つたりして出かけて、夜になる

と家の中にぢつとしてゐられない癖が滲み込んで來た事をも思つてみた。そして今迄の心と異つて、稍もすれば奢り昂る心がぐんと芽生えてゐた彼のなさけない心を自分で見たのであつた。眼に見えない惡魔が自分を翻弄して、邪道に引き入れやうとしてゐるやうにも見えた。そして此れが自分の身の破滅なのではないかと恐れ戰いたりもした。

家へ歸つてみると、母は相變らず針仕事に精を出してゐる。行火の入つた温かい蒲團に潜り込んでも尙ほも彼は、破滅から破滅へと急ぐ狂ひ亂れた自分の心の妄想を强へられるのを苦しんだ。

疲れ切つてる母は、寢床に入ると、もうすぐに心地よさ相に寢息をさせてゐたが、彼はどうしても眠れなかつた。眠らうと思つて心を空しくしやうとあせればあせるだけ眼が、頭がはつきりと冴えて來た。隣りの間借りの夫婦の鼾が又耳に付いて何うしても眠れなくなつて來た。忍びやかに通つてゆく風の音が鼓膜に吸ひ込まれる如に感じた。夜警番の金棒の音、鍋燒うどん屋の聲、靜かな中に時々めり〳〵と聞える家鳴り、時計のセコンド。爐の中で火の崩れる微かな音。そうした音でない音迄もが渦を卷いて、强く、高く彼の耳を打つて來るのであつた。闇の中で眼をはりつと、明けると、そこには色々な形、樣々な色がフエルムのやうに引切りなしに通つて行つた。

――もう來てもいい頃だ。」彼は心の中で又しても繰り返した。十一時着の終列車で來ると夕刊はもう配達される刻限だと思つたのである。

彼は幾度が寢返りを打つた。

長い時間が經つた。

と、彼は、する〳〵と新聞が戸の隙間から差し込まれる音をきいた。始めの中は、今迄二度程似よつた物音に騙されたので眠つとしてゐたが、今度こそ本當らしいので、ふいと、然しこつそり立つて行つた。寒さがどつと彼の身體を取り卷

いた。首筋あたりから脊中へぞく〳〵と栗粒の立つのが知れた。

彼は立闕に立つたまゝ、雪明りにすかして新聞を見た。張いインクの香いがぐつと鼻に來た。と、とたんに彼は又呼吸のつまるやうな、そして頭にぼうと血が上りつめるやうなのを覺えた。

――載つてる。載つてる。」彼は心の中で斯う叫んだ。尙ほも眼を見据えて薄明りに小見出しを讀むと、「驚くべき某紳商家庭の醜狀。」とあるではないか。

――何んといふいやらしい、そして誇張した見出しなのだ。」「俺のあの原稿は斯う迄非道く惡辣にあばいてはゐないのだ。」彼は編輯人の下卑な、そして低級な小見出しに先づ驚いて終つた。が、忽ち又、

――あゝ到頭載つて終つたか。」と、萬事休した如な感慨に耽らざるを得なかつた。彼はもう一度瞳の奥に疊み込むやうに見出しと、小見出しを讀んだが寒さも何にも忘れて、唯茫然と立闕に棒立ちに立つてゐた。

悔い

豐田利生

神樂坂で電車を降りて矢來の方に、太つた體軀を緩り運びながら正は山田が下宿に居れば良いがと思つた。永い雨續の天氣が、からりと晴れたので散歩にでも出てゐるなら如何したものかとも考へて見た。が、彼だから約束を忘れるようなことはない。けれども、正は不安の間に矢張り、山田の下宿の方に歩いて、矢來の交番から左に折れて進んだ。行當りの家が見え出すと何となく足が竦むのだつた。彼は表札を一寸と見て、潜戸の前に立つた。山田が居れば良いが、正は戸は開くる前に時計を見た。五時二十分だつた。約束の時間には十分早い。思切つて潜戸を繰つて内に入つた。

「御免下さい。」

「はい。」

宿の娘の聲らしい。其は山田の部屋かららしかつた。正は以前三四ヶ月此の家に居たので、間取でも家の者の聲でもよく知つてゐた。誰も出て來ないので、正

はおどおどしながら又呼ばうとした。が喉の邊まで〻聲は出なかつた。やつと三度目に落着のない聲が出た。

「ご免下さい。」

「はい。」

今度は娘が笑ながら出て來た。

「山田、君は、居ますか。」正は平常の譜謹たような口調で言つた。彼は其麼言振りするのが癖だつた。

「ええ、居らつしやいます。さつきから、待つてゐらつしやるんですよ。貴兄がおいでになると言つて。」

「あゝ、そうですか。上つてもいいんですか。」彼は靴を脱いで片足廊下を踏んでゐた。

「あらいやな人、最早あがつてるぢやないの。」娘は笑つて先に立つて山田の部屋の方に行つた。

正は娘の後に付いて行きながら、山田が娘に例の話をしてゐたのぢやないかと思つた。と何となく娘がさつき、笑つたのが氣懸りに思はれた。

「ほら、やつぱし本多さんでせう。」私知つてたわ。娘は山田の横に立つて、正と山田とを見較べるように見た。

「今日は。此の間は失敬した。」正は中折を机の上に投げながら言つた。机の上には、小説のやうな厚い本が開かれてあつた。

「今日は。私こそ。」山田は座蒲團を正の方に出しながら。彼の額を見た。「急いで來たの。」額の汗に眼を付けた。

「いゝや。」正は汗を掌で拭いた。でも、娘の方を見て

「光ちやん。水を一杯下さいね。暑いから。」

「ええ。」光子は笑つて向うに行つた。

「繁しやんあれ書いてくれたの。」光子が去ると、正は口早に聞いた。
「昨夜。」山田は机の抽出の底の方から二三枚の紙を出して、正に渡した。
「有難う。」正は折つて、ポケットに入れようとしたが、又擴げて讀み出した。と光子がコップに水を注いで來た。正は狼狽して、紙をカクシに捩込んだ。がそれは光子に見付かつた。
「いかんばい。」光子は九州辯を眞似て笑ひながら言つた。
「よかばい。」山田は鸚鵡返しに、故意と光子の口振りをまねた。
三人は一緒になつて笑つた。それから光子は夕食の仕度に出て行つた。二人切りになると正は、ぢきに口を切つた。
「此をだして、何とか言つて返事が來ればいゝがな。何樣、貴兄が早く歸つたので、それに、あの手紙が來た時森君に見せたら有望有望と言ふんで、早速手紙を出したのさ。所が其の後は音信不通と來たのでね。貴兄に話したように其の手紙があまり嚴直に書いたので。……」正は苦笑した。
「でもね。――まあいゝさ。あの女の手紙を見れば、丸切り無いでは無いからね。唄の文句を、思ひ出したやうに書添へるなんて。なんとかだつたね。「鳴く蟬よりも鳴かぬ螢の身をこがす。」……森君の言ふのは當然だよ。實際あんな添書をするなんて、ね、貴兄がもつと穩に出て居れば心配なしだつたんだが。」
其れは六月の十日の頃のことで、恰度、山田が姉の病氣で歸省する四五日前のことだつた。正は突然山田の下宿を訪ふた。用と言ふのは手紙のことだつた。此の時迄に二人は三四度會つた切で、それでも、ほんの、友達の所で會つて二三事話したと言ふだけで、親しい仲にはなつてゐなかつた。
正は山田と同鄕ではあつたが、彼よりも四ッ年上で、中學も山田や森の出た中學ではなく、同じ福岡縣ではあるが彼等の中學から三里程隔てた八女中學の出身だつた。今年の春、熊本の高工を卒業すると、早速東京へ來て土木事業の會社に

入つたのである。

正の突然の訪問は、少からず山田を驚かした。が、正は邪氣無い快活な、よく肥え太つた體軀の短い、活動のデブ君に似た所があつた。で、誰にも親しみ易く、山田も彼と話すのを心持よく感じた。正は山田を訪ふと、始めつから、持前の個性を發揮してゐた。

「やあ。今日は。」

山田は此の愛想のよい挨拶に魅せられてしまつた。

「實はですな。」有繋の正も一寸言ひ竦んだが、熊本訛の言葉で「その、その、一寸言ひにくいのだが、何です。手紙を一つ書いてもらいたいのですが、どうでせう。」

山田は其の手紙が怎麼種類の物だか、すぐに胸に來た。正は諧謔的な口調を續けた。

「その、その、手紙と言ふのが、一寸言ひにくいので、――私ぢや書けないので書いても、拙いものしか書けないので、の、要するに、普通の手紙でない女に遣るのだから。其の心算で艶ぽい所を一つ。……」

それから山田は、遣先の女のことや、正との關係等一先づ訊ねた。

「向うの女と言ふのは、要するに私を知らん。だが私の方では知つとる。熊本に居つた者なら、と言つても、琵琶等の趣味のある物なら。大底知つとらうと思ふがの。」

斯うした正の話によると、女は熊本の坪井町の者で、可成に琵琶が彈けて舞臺等にもよく出ぢらしかつた。年は二十程で。痩方であるとか。そして、一寸自分で書いて見たとか言つて山田にそれを見せた。拙い書き方であつた。書いてあることは、御幸坂の櫻を見ずに熊本を去つたのが殘念だとか、唐人町で貴女が近所の小間物屋の娘と一緒に蕎屋に入つた時、戯をしたが貴女は忘れてゐらつしやる

だらうとか。熊本は私の第二の故郷で如何しても忘れることが出來ぬとか。女を魅するようなことは殆ど書いてなかつた。

「ぢや、まづ斯樣な要領くんですね。何日頃まで。」

「出來得るならば、明日でも、どうでもよいから、今夜此所で書いてもらつても、さうだと明日會社の暇の時間に清書して投函するから。」

「でも此所で今とは、一寸困るから明朝來てください。屹度書いて置くから。」

結局明日書くと言ふことにして、話は終つた。正が歸ると、山田は机に倚れて考へて見た。隨分面白い男だな。そして罪の無い。所で此は考へ物だ。怎麼風に書いたらいゝか知ら。あの下書ぢや女も、と可笑くなつた。

散歩から歸つて山田が机に向つたのは九時過ぎだつた。自分が送るのなら、どうでもいゝが責任があるからと思ふと、筆が立たなかつた。雜誌を讀んで心を落着かせて、山田が筆を執つたのは十二時過ぎてからであつた。筆の運は思ふように進まなかつた。便箋十枚に小さく書いて一先づペンを置いたのは朝の五時過ぎだつた。又一應讀返して所々にペンを入れたりして、漸く六時頃に出來あがつた。

「お蔭で今日は缺席か。」と呟いたが、悪びれた思はしなかつた。手紙を封筒に入れて臺所の方に行くと、宿のお主婦さんは起きて居た。其の當時山田は、若松町に下宿してゐた。

「今朝は偉い早起きですね。」お主婦さんは、驚いたように、板張に立つてゐる山田を見て言つた。

「所が、さうぢやないんです。今から寢る所です。」お主婦さんは愈驚いた。

「ぢや、今迄起きてゐらつしやつたんですか。まあ。」

「すみませんが。昨夕來た人が朝來ますから。其の時此れを渡して下さいませんか。」

「えゝ、かしこまりました。」

「ぢや、どうぞ。」

山田は掻巻を着物の上に冠つて、すぐに寝た。

正は會社へ出勤する時、少し廻り路にはなるが、若松町の山田の下宿を訪れた。お主婦さんは山田の手紙と其の譯を言つて手紙を正に渡した。

封筒は可成重く厚かつた。怎麼事が書いてあるか知ら。會社に着くまで不安な氣が持ち續けられた。彼は勤務時間まで三十分程の間があるので、庭に出て封筒を破つて見た。厚いから太い字で書いてあるのだらうと思つてゐたが、彼の豫期は違つてゐた。便箋を引出すと彼は驚いた。小文字で、しかも便箋は大形なのに各紙とも一杯に書いてあつた。大急で讀んで二十分以上は充分費された。

會社での正の仕事は其の日は別に是としたことは無かつた。彼は午前中費して手紙の淸書をした。中の文句は有繋彼自身のものとは比較出來ない程だつた。昼食を喰ふと彼は莞爾〳〵しながら郵便局に向つた。

山田はそれから四五日經つて田舍へ歸つた。

正の所に熊本からの返事が着いたのは、六月の二十二日の朝だつた。彼は返事を女が書くとすれば、自分の所に何日頃には返事が着かねばならぬと計算してゐた。出したのが、あの日の正午だつたので、神田の本局に行つて停車場に送られるのは午後の四時前後だ。と、四時五十分の下關行の急行に間に合ふ、汽車が下關に着くのは次の日の午後の六時頃だ、それから門司熊本間が八時間、熊本驛から坪井局に送られるのは三日目の午前五時頃、さうだと朝の二番か一番の配達で、彼女の手に渡る筈だ。彼女は屹度まだ食事の頃だ。何と思つて俺の手紙を見るだらう。それから二日を中に置いて返事が出されると二十一二日前後には俺の手元に返事が來る。と微笑んでゐた。其の二十一日から彼は早く起きて、郵便受納箱を覗きに門の所まで行つた。二十一日の朝は返事は來てゐなかつた。會社に出ても何だか返事のことが氣懸りだつた。下宿に歸つて見ると机の上に手紙が置かれ

てあつた。がそれは、友達からの手紙だつた。二十二日の朝彼が門の箱を覗いた時は、まだ配達が來てゐなかつた。朝食がすむと彼は服を着る前に又、一度箱を覗に行つた。が、やはり手紙らしい物もなかつた。出勤の時に又覗いたが、まだ無かつた。潜戸を開けて路へ出ると配達夫が、隣に入つた。愈彼の所に返事が來てゐるように思はれてたまらなかつた。彼は配達夫が來るのを門の前に待つた。配達夫から受取つた手紙は四五通あつた。彼は手に取る時、水色の封筒を見た。それは自分に來たのだと思つた。彼の思は當つてゐた。蟲の知らせかと思つて見た。外のは皆、宿の者宛であつた。彼は其を隠しに入れると落着かぬ氣持になつて、會社迄の電車の中が待遠く思はれた。會社に着くとすぐに勤務時間だつた。彼は早く手紙を讀で見たかつた。何と書いてあるだらう。色々に考へて見た。でも女から、特に女と言ふ他人の女から手紙を受取つたのは二十四の今日が始めてであるだけ、彼の心の動搖は激しかつた。心は落着かなかつた。

「本多君は工合でも悪いのか、もぢもぢしてゐるが。」

横の男が彼にそう言つた程、彼の落着は失はれてゐた。

「えゝ、少し腹工合が。」彼は、はつとして出鱈目に答へた、が次の瞬間。彼は良い事を言つたと思つた。便所で見よう、此の手紙を讀まう。

彼は悪臭も何も感受せられない程、昂奮して顫へる指先に桃色の便箋を弄しと握つてゐた。

手紙の内容は、斯うであつた。「知らぬ貴兄からの手紙は嬉しい、が、家が厳格で、手紙書くのさへ注意されてゐる、だから、此の後は、手紙送らないでくれ。」でも、男戀しさの心が明かに知られてゐた。それに又、「泣く蟬よりも泣かぬ螢の身をこがす。」と言ふ文句が後で書添へたらしく書いてあつた。

正は惑つた。一體此は如何したものだらう。今後、手紙は書いてくれるな。だが、其の手紙の文句から見ると一片の挨拶に書いたのではあるまいか、其の實、

手紙をくれと言ふ暗示ではあるまいか。その日から、解けぬ謎の謎が彼の頭を悩ました。幾日か過ぎた。けれども、女の心髓は解くことが出來なかつた。誰にか問ふてみよう。山田君が居るといいのだが。

正は猜疑と恐怖の心を思切つて森の所に出かけた。一體怎麼ものだらうか。」森は手紙を見ると、「有望だ。」と言つてくれた。其の妹も恰度來合せてゐたが。彼女も、「女が此れだけ書く氣だつたら、それに、此な唄まで書添へる程だつたら、お安くないんだわ。」と言つた。正は森兄妹に斯う言はれて見ると、さうだな、と思つた。

「一體どうだらう。手紙を出しても悪くはないのだらうか。」彼は歸りしなに玄關の所で改めて又森に訊ねた。

「結構だとも、遣つて見たまひ、大丈夫だから。」森は自信ありげに、彼を見遣つた。森の妹も「大丈夫ですよ。」と附加へた。

正はいそいそと道を急いだ。が、急に不安が襲ふて來た。「何と書かう。さあ、困つたことになつた。」と思つた。俺にはどうせ艶ぽい所は書けない。でも自分で書かなくちゃならないんだからな。彼はふらりと神樂坂の夜店を覗きながら下宿の方に歩いた。

彼は其の夜一時過ぎまで机に向つてゐた。机の上には便箋と「男女の手紙。」と言ふ本が置かれてあつた。正は森の家からの歸りさに、神樂坂で恥かしさを、壓へてそつと「男女の手紙。」を買つたのであつた。次の日彼は會社の机の上で女に宛ての手紙を清書した。

幾日經つても女からの返事は來なかつた。八月に入つても何の便りも到らなかつた。彼は森の言つたことが疑はれた。實際森はああは言つたが。——彼は自分の手紙の文句の如何には些も、考へて見なかつた。

八月の中頃に正は小石川に引越した。

熊本の女。熊本の女。彼の頭から忘れることの出來ぬ女であつた。やはり返事は幾日待つても來なかつた。彼は毎日毎日悶の内に、あてもない輝を描きながら若しか返事をよこしてくれるかも解らぬと思つて居た。

唄はう、唄を唄つたら惱が暫時でも忘れることが出來る。彼女を忘れると言ふことは自分に取つて第一に爲さなければならぬことだ。早く彼女の幻から去りたいと考へた。

「本多さんは、近頃、ほんとに樂いようね。子供の樣に唄ばかし唄つて、だからそんなに太るのでせう。」宿の者によく斯う言はれた。

「いや。樂しいことは些もありませんよ。實際。私が唄を唄ふと言ふのは、心苦しんでゐるからですよ。それで其の苦しみを暫時でも忘れて見ようと思ふと。何を言つても唄ですね。唄つてゐる間は何も他のことを思ひませんからな。――唄が一番いいんですよ。一つ唄ひますかな。」

「何て間がいんでしよは何所から流行る、流行る博多の柳町。何て間がいんでしよ。」

てね。面白いでせう。」

正はよく唄つた。が、唄ひ終るとすぐに其の跡が淋しく悲しくなるのだつた。八月の二十五日に東京に着くから迎ひを賴む、と山田から葉書が着くと、彼は熊本の女のことが引續き思ひ出されて來た。

「二五ヒアサ七ジック、ヤ」

電報が着くと正は其の晩眠れなかつた。山田の生々した姿を搔卷の中で描いたり、それが消えると、熊本の女の顏が浮いて來る。何時の間にか彼女の手紙が、活動寫眞の映畫のように大きく劃大されて影の如くなくなる。又彼女の姿が現れる、と今度は矢來の娘が描かれた。とうとう三時打つまで眠れなかつた。

六時になると彼は東京驛に出かけた。電車に乘ると、寢不足の眼がちくちく痛

むのを感じた。水道橋で乘換の所だつたが、萬世まで行つてしまつた。彼は電車の中で山田のことを考へた。何も徹底しなかつた。次ぎ次ぎに斷片的な思ひが浮んで來るばかりだつた。

「寢不足の眼に芙蓉ある住居哉。」

彼が電車の中から紫陽花の美しく咲いてゐるのを見た時、此の句を思ひ出したのが、彼の電車中の出來事の第一のものであつた。其の句は山田がよく口吟んでゐた句であつたからでもあつた。

停車場に着くと着車時間まで十分しかなかつた。

雪崩れの如く吐出される人浪の中に、正は努めて丈の高い男と思つて眼を走らせた。山田は學校の正服にヘルメットを冠つてゐた。日燒した赤い顏が氣持よい輪廓を保つてゐた。

「どうも御苦勞でした。」

「いや、どうして。」

學期始めに近いので手荷物の受取場が非常に込んでゐた。でも辛うじて早く荷物を手に入れることが出來、柳行李は至急配達に頼んだ。宿は以前本多の宿であつた矢來の家を前から本多に頼んで交渉して蒲團等は本多が其所に居る時に移してあつた。

電車に乘ると二人は一寸落着いた。話は國のことで始められた。

「筑後川も矢部川も隨分みじめな樣でしたつてね。」正は車掌に切符を差出しながら言つた。

「えゝ、慘憺たるものですよ。筑後川の橋など、流失しなかつたのは鐵橋だけと言ふんですからね。上流の方の何とか言ふ橋ですが、何でも福岡縣の模範橋とかの鐵筋コンクリートのシャンシャンした橋で、それに竣成して一年と經たないのが、兩端をのこして流れつちまつたと言ふんですからね。」

次の停留場で職工達が、どやどやと乗込んで來て電車の内は一杯になつてしまつた。二人の話は一寸と杜切れた。次に話しだしたのは前の續きではなかつた。

「所で例の方は如何なりました。」

「例の方と言ふと。」正は熊本の話だとは思つたが、さう言つた。

「例の方ですよ。ほら熊本の方のですな。」

「あー、あれですか、あれだつたら面白かつたんですがな私ぢやどうも……。」

「何とか言つて來たんですね、言つて來さへすればいいも惡いもないぢやありませんか。占めたものですからな。」山田は女が出したな。手紙さへ來たらそれで滿足だ。どうにかなる。と思つた。が正が苦笑してゐるのを見ると彼は默つてしまつた。

「所が占めないので、第二の手紙を出したが返事も何にもよこさないので。勿論よこさないだらうとは思つてゐたんだが……。」

「ぢや、初めての手紙は何と言つて來たのです。」山田は不思議に思つた。初めは返事を書いて第二回目には返事をよこさぬ。

萬世橋から二人は新宿行に乗り換えた。

「さうだな。あのね、私は暗記してゐますがね。」正は、手紙の文句を次ぎ次ぎに暗誦してゐた。そして、終りに、「此の後手紙はよこさないで下さい。」と書いたのを、「よこさないで頂戴」と書きなほしてあるのも　又、後で書き添へたらしい例の文句の「泣く蟬よりも泣かぬ螢の身をこがす。」と言ふのを、それから紙の色、封筒の恰好、文字があまり上手でないこと、切手が表面に調和よく少し右に傾けて張られてゐて、裏には田舎の娘よりと書いてあつたなど眼に見るやうに話して聞かした。

「で貴兄は何と言つて、やつたんです第二信を。」

「まあ降りて話しませう。」

やきもち坂で下車して宿の方に歩いた。

『何を書いたんですか。それが問題ですがね。』

正は失敗つたと感じたのは此の時だつたあれぢや女も返事をよこさないだらう。實際、あんまり性急すぎたからと思つた。

『少々言過ぎたので。』

『第二が大事でしたがね。でもそれ切りもう出さないのですか。出したら如何です。』本田君だから直入一點張で書いたんだなと覺つた。『今一度出して御覽なさい。先方が返事をよこすにせよよこさないにせよ。』

本多は宿に着いてから旅の疲勞を感じてゐるからと言つて、二人は錢湯に出かけた。洋食屋から湯屋に行つて歸つたのは十一時頃だつた。正は晝食を喰つて二時過ぎまで居た。宿に着いてからは熊本の話は出なかつた。

本多は何となく其の後一週間ばかりは落着かなかつた。九月に入つて、東宮奉迎の賑ひがある頃には東京らしい氣分になつてゐた。雨が續きだしたのも其の頃からだつた。毎日の通學が苦になる程降り續いた。山田も其の後は姿を見せなかつた。彼は毎日考へてゐた。悶えてゐた。自分と言ふものが何の爲に生れて來たか、よくさうした人にありさうなことを。

正が雨のしと〳〵降る夜不意とやつて來て熊本に手紙を出すから明日の夕方までに書いてくれと言つて來たのは昨日だつた。本多は可成驚かされた。一體何を何と思つて來たのだらう。でも正のさうした心理狀態を見るのが好ましかつたので、快く承諾して書くことにした。

『ぢや。ついでに、封書を一つ宛名は此の通りに。』

二人はそれから夕食をすまして神樂坂の方に歩いた。牛込驛の上の橋の手摺に凭れて闇の流れを聞きながら沈默の長い時が續いた。彼等は思ひ思ひに考へた。

再び神樂坂に上つて來た時には人數も隨分少くなつてゐた。

「コーヒーでも飲んで別れませうか。」正は先に立つて左の方に折れて五六間行くと、些としたバーに入つた。其所は正がよく行く所らしかつた。

「隨分御無沙汰ですね。」女は愛憎よく正に口をきいた。

「遠くになつたんで、それに雨ばかしだつたもの。」正は椅子に投げるやうに身を落した。

女と言ふのは、よく太つた。肉感的な、そして舊劇に出る若い女中のやうな聲の持主でつあた。本多は多少其の身振りと聲で、氣をいらだたせられるように感じた。

其所を出ると正は話しだした。何でも正が此の春東京に出て來て以來の寄り場であつた。正は散歩の度に此店によつて食つた。其の都度女に釣錢の少しを與へてゐるので受けがよいと言つた。で、彼を曳出して見ようと思つてゐるとも言つた。

まさかバーに居る女で、正の手に自由になる女が。本多は笑ひたいくらゐだつた。でも又其樣に言ふ正の心が如何に働くかを見て居たかつた。

「四五日内に一つ女給に送る心算で書いてくれ。」と賴んだので、本多も好奇心から承諾した。

其の後三日目の夜だつた。本多が散歩に出ようと思つてゐる時に正の來訪を受けた

彼は本多の姿を見るなり「しくじつた。」と言つた。「熊本の女の姓を誤つて居るから送戻されるような氣がするので、やつて來た。封書を一つ書いて。」それから神樂坂の女のが出來てゐるならと言つて、下書を其所で淸書した。女の名は「百代」と言ふのだつた。封筒に手紙を入れる時の正の手は、顫へてゐた。ほんたうにまだ若い心だなと本多は其の手付を見て可笑しく思はれた。

其の夜二人は神樂坂のバーに出かけた。本多は中途で暫く坐を外らすために通へ出た。

五日ばかり終つて熊本から先の手紙が舞戻つて來た。バーの女からも何の返事もなかつた。

「俺の初戀は失敗かな。」正は呟いた。

「女は何を望むのか知ら。……金だ。美貌の奴を落藉しよう。此だつたら云々は何にも無い。學問が何にならう、金だ。金だ。富者が羨しい。金が欲しい。今から五年も經てば女郎が落藉されるだらう。普通の女は俺れを去つて行く。」正は床の中で月給や手當の計算を始めた。「俺は何故學問をしたのだらう。今迄働いて居たら、中學が五年、高工が三年、今は女郎一人は落藉される金子になつてるのだがな。」彼は蒲團の中にもじもじしながら、華かな中學時代高工時代の勉强の跡が苦しい涕となつて描かれるのだつた。

一九二一―一〇―一九

老人が鷄を見てゐる話

松村　茂

「自分一人が除者にされてゐるのではないか知ら……意氣地ない――」

私は自分の身のまはりに可成り執念く腦まされた果、到頭そう思はれて來た。

西の窓障子には赫々とした夕日がさしてゐた。もう、これ以上、ぼつねんと考へ込むのが限りなくうたとくてならない。

「まだお前達の時分に意地張るのは損だよ。身上の人にはたてないとね……」

そう言はれた言葉がまた思ひ出されて來て、凝りかけた心臓を被ひ包んだ。何でも自分を慰めてくれるもの、慰めてくれると云ふよりは庇つてくれる人が慕れて來た。

「……不見目だ！　强がりの自分は矢張り弱いのだ」

私はもう寒氣に襲れた。

私は無意識乍らに座を立つて窓際によつた。浮雲のない夕空には、さながら暖さを思はせる水蒸氣がたゞよふてゐた。

私の部屋は二階にあつて、窓下は私の家に通ふ路次になつてゐる。私の家は街から二十間程、入り込んだ路次の衝き當りにあつて、路次の左側に平家の長屋、右側に添ふて二軒の家が建ち並んでゐるのである。大地を照してゐる夕陽はこの路次にも流れ込んで照り返してゐた。

長屋の間は路次との仕切りに板屏が作られてあつて、その屏は古く、ほとんどが修繕のあとである。

「老人」

私はその板屏を見るや否や直覺的にこの長屋の差配の老人の姿が思ひ浮ばれて來た。

この老人は自分で差配してゐる家の週圍を日に二回三回とまはつて、破損を繕ひ歩くのであつた。老人は朝餉後の休憩を充分とつてから、さながら田舍の百姓男のやうな身仕度をして、そろりそろりと歩き廻つてゐるのは毎日のやうとは云へ神妙な氣がする。

老人は長屋を間貸してゐるのであつた。老人は間借りしてゐる人とも物數は語らなかつた。

「お爺さん、この板屏から犬が這入つて困るんですが」

私は間借りしてゐる人が促すやうに言つてゐたのを覺えてゐるだけである。その時老人は

「はゝん」

と、重い返事をし、その場所を暫く眺め、自分の所有(もつ)てゐる道具を大事そうに、自から取り出して來て繕ひ始めた。そして氣の毒な程、時間を消費してやつと繕ひ果てたのであつた。

然し、老人は大抵の場合、自分で破損の場所を見出して、何か大發見でもしたかのやうにせつ〳〵と仕事を續けるのであつた。

老人は夕方になると型のやうに直ぐ着物に着かえるのであつた。それからは鶏の世話に專念する。鶏は老人にとつては一番の慰安物であると言つても過言でない程愛してゐるのである。

窓から老人の家の方をのぞき込んだ私は、仕事姿の老人より他の老人の有樣が思ひ出されて來た。

「老人もう鶏を眺めてゐるな」

私はもう堪らなく老人に會ひたかつた。

長屋の玄關口は路次には向つてゐない。少し斜になつてゐて、その前は四坪程の空地になつてゐた。この玄關口の部屋には老人の夫婦が住つてゐるのである。玄關前の空地は路次との反對側に割竹の矢來がしてあつて、庭の植込みと仕切つてあつた。この矢來の高さは一間餘りもあつて、庭木が抵いためか、ほとんど木立が見られなかつた。然し空地の隅の方には二三本の梧桐があつて、矢來よりも一倍高く聳えてゐた。

この空地は老人が鶏を飼ふために明けてゐるのであつた。十羽前後の鶏が、さながらこの地の附屬物のやうに、放たれたま、遠くへも去らずに砂浴をしたり、時を啼つたりしてゐるのである。

老人にとつては彼の課業の後、心さつぱりとしてこの鶏を見入るのがせめての心の慰めであり、老後の何よりもの樂しみであるらしい。

空地へ差しかゝると案の條、老人の姿が眼にとゞまつた。

老人は仕事着の時のやうに古茶蕉けた緣の廣い帽子をかむつてゐなかつたが、その代りに古い眼鏡をかけてゐた。蚤生とは云えないが、頭髮に續いて生え下つてゐる綺麗な頬髯や顎髯は鬚と共に純白に光つてゐた。

老人は蕉け鶯茶の綿入れに鐵無地の羽織を羽織つて、懐手をし、背を聞るめて

心持ち頸をふり上げて、矢來の頂を眺めてゐた。その皺よつた細い眼の遥いてゐる處には、これも餘程しねた一羽のレグホンの雄鷄がとまつてゐた。

私はそれを見るとあまりに注文にあたつてゐるので、氣がひけてそのまゝ通り過ぎやうかとも思つた。が、今の先の事などが思はれて來て、老人の背後に差しかゝつた時

「暖になりますと鷄の世話もずつと樂になりますね」

と、勇氣を出して言葉をかけた。

「……」

然し老人は見向きもしなかつた。

「い、鷄ですね――このレグホンは……」

私はあまりに物足りないので、またそう言ひたして見た。老人は今度、心持ち振り返つたが、更に返事をしない。そして私のゐることを確めやうともしなかつた。

夕陽は赫々として雲間から名殘り、薄明るく照りつけてゐた。

梧桐の木の先の方で簇出してゐる枝は、あの大きい幾多の葉片を落した後の思ひ切りを現し、また來る春を待ちこがれてゐるやうでもあつた。

私は老人から返事されない馬鹿々々しさに一時はあたりを見廻つてゐたが、一度思ひがけた事はどうしても思ひ止ることは出來ないのであつた。私はこの老人とはこれ迄餘り話した事がなかつた。機會がなかつたと云ふ理由ではないが、老人が人と話すことを好かない容子だつたからである。然し、私は他の不粋ぬ事にお互が饒舌する人々よりは、この無口の老人に話したい好奇心と、人懐しさを感じてゐた。

「トルストイ」

この言葉の意味が老人を思ふ影のやうに私の意識から離れなかつた。

老人がその家の圍りで働いてゐるのを見る度に、その外貌がトルストイの寫眞そつくりの點があると思つたからだ。それが一層私の心を老人に索きつけるのである。

老人の飼つてゐる鶏の内でレグホンの三羽番だけは他のに較べると、水際立つて立つて立派だつた。

「この三羽番だと、安くて三十圓――三十五圓なら何日何時でも賣れる」

從兄の敏之はこの鶏を見た最初、斯う言つたことがあつた。

私は今その事を思ひ出して、事新らしく老人と同じやうにつく〴〵と鶏を眺め入つてるのだ。

「實に綺麗だ！」

私は心の内に嘯いで、何を考へるともなく

「この鶏は餘程お飼ひになつたのですか？」

と、今度は老人に接近して訊ねた。

「え、」

老人は、見向きもせずに、また鶏を眺めながら、不精たらしい返事をした。

老人にどんな話をもち出せばい、かと考へた揚句

「私も中學時代に田舍でレグホンを飼つた事があるのです。この鶏と同じ褐色でした。矢張り三羽番で……」

私は老人に鶏の事を話すのが始めてだ。私は上京してから滿三年餘りになるがこんなに痛切に鶏のことを回想したのは今が始めてゞあらう。

私の飼つてゐたレグホンと云ふのは父が縣の農事試驗場で、自分達の土地に擴めるのだからと云つて買つて來たのだつた。私は本當に綺麗だつたので。父に代つて世話をしてゐた。その内何時となしに自分の所有になつて終つたのである。

「鶏を飼つてゐるのは樂しいものだ」

私は堪らぬ程、鶏を飼つてゐた當時のことを思はれて來た。そして鶏の所有主になりたくなつた。

「あなたも褐色レグホンを飼つてゐたと言ふのですか？　純粹でしたか？」

老人はやつと私に聞き正した。

「父が縣の農事試驗場で買つて來たのでしたから、純粹でした」

「純粹と云つても、本當の純粹と云ふのは少いのですからね、純粹だと思つて飼つてゐる鶏でも、年々孵化してゆく内に隨分變種になつて終ふ事が多いのですからね」

「すると、あなたのこの鶏は本當の純粹ですか？」

「えゝ、これが本當の純粹です。むかうから持つて歸つた鶏の卵を孵化したのですからね、この鶏の親はもうゐなくなりました。それでね、これが一番純粹です。」

「僕の飼つてゐたのも、雜種ではないと云つてましたよ」と、私は自分の飼つてゐたの窃と比較してみて

「矢張り純粹でした。この鶏とは別に變つた處はありませぬ。鳥冠の形態から、その大きく垂れ下つてゐる處、その色も、毛色や尾の長く引いてゐる處は、寸分も變つてゐないと云つてよいくらゐです」

私は老人に自分の言葉を納れてもらほうと思つて、斯うつけ加へた。

「それは、あなたが云ふやうに、この鶏と變つてゐないと云ふ道理はない」

老人は重い口を、ぶしつけに叱るやうに言つた。

「さうですか」

私は悔しかつたが、老人の氣に呑まれて斯う答へざるを得なかつた。

「あなたの飼つてゐたとか云ふ鶏はむかうから來た幾代目ですか？」

「そんなことは別に聞いてませぬでした」

「そんなのは、もう純粋とは云へない」

老人は益々叱りつけるやうに、また苦むやうに、特に髭だらけの顔を向けて言つた。

「でも――それは理由にならないですよ、幾代經つても、純粋と云ふ意味は他の鶏の種さへ混ぜらなければ――あなたの言はれるやうに土地に馴れた馴れぬと言ふのは、これとは別問題のやうに思はれますが……」

私は氣が焦つてゐた矢先だつたので、むつとした心持で心にもなく言葉でつき返した。

「いや、そんな馬鹿な理屈はない。あなたの鶏は純粋とは云へないが、この鶏は立派な純粋だ」

老人は鶏と、私の顔とを見較べて言つた。

「それはあなたの思ひ異ひですよ。それには私も、あなたの鶏は原始的だと認めますが……」

「そんなことはない」

老人は斷言した。

「頑固な爺」

私は吐き出すやうに思つたが

「あれだから、こんなにこの鶏を可愛がつて、あれだけの世話もするのだな」

と思ひ返した。私はこの老人をとらへてこれ以上議論したくはなかつた。

老人の身體は實に壯健であつた。また氣健な質でもあつた。朝起きると、あ洗面に先立つて鳥屋から鶏を一つ一つ大事に庇つて出し、空地まで追ひ出すのでつた。

この時鶏は老人の肩にとまることがあつても一向平氣でゐた。老人は斯うして

朝も二十分餘りは無言のまゝ見入つてゐるのである。鶏がどんなにしてゐても蟲立したまゝ、最初に佇んだ場所よりは離れない。今度はその場所を動いたかと思ふと、もう鶏にも一瞥をくれずにすん〳〵玄關に上つて行く。そして今度勝手口から出てくる時には一升桝型の餌箱を三つ提げて出てくるのだ。三つの餌箱は一間置きに、庭との境の矢來に添ふて竝べておく。竝べると今度は一寸の間も佇まずに勝手口へ戻つて終ふのだ。

この時老人の妻はちやぶだいに向つて彼を待つてゐるのである。かうして老人は二人きり朝餉を了へて、やつと茣を吸ふのであつた。老人は妻にでも進んでは仲々口はきかない。

「今日は晴れた天氣になりましたね」

妻はたまに、朝餉後の老人の仕事に勢をつけるやうに、かうした言葉を持ち出すのだ。すると

「晴れて來たかな」

と、一人ごとのやうに、一口答へるぐらゐだ。然し心情はさうでないらしい。

「年取つてからの夫婦と云ひますからね。あの人達もあれでゐて……」

隣の人々が何かの噂の次手に話し合ふことがあつた。

老人には子供が無いから、お互に慰め合はなければならなかつた。二人は神を拜むのでもなく、佛に歸依してゐるのでもなかつた。どう見てもこの老人ほど、自分に強く頼つてゐる人がないとまで思はせるのであつた。

老人は大概、夜になつてから妻と話すのであつた。

「鶏の餌はまだ大丈夫だらうね」

林閑としてゐる時、老人から話し出すのは斯うした言葉だつた。

「えゝ、まだありますよ。昨日も××さんから御飯の殘つたのを貰ひましたし……」

妻はこの老人の妻とは思へないほど若々しい愛嬌者であつた。

「それでは、どれだけ殘つてゐるのか」

老人は妻の顔も見ずに云ふ。

「まだこれだけありますからね、後三四日は大丈夫です……」

妻は老人から云はれると直ぐ立つて殘つてゐる分量を見せるのである。

「これで三回目てか？」

老人は見るだけでは滿足せず、手で觸つて確めるのである。

「あるでせう」

妻は確答を促す。すると

「うゝん」

と、云つた切り何の表情さへしない。

然し、こうした突劍じみた會話や所爲にも老人は、妻には老後の愛を裕にその

内に含めてゐた。

二人は牀についてからも、若者夫婦よりもよく話すことがあつた。

家の修繕の難易については妻から訊ねられることがあるが、自からしたことはなかつた。老人から妻に向つて話し出すのは鶏に關することのみであつた。

「この頃は卵を休んでゐるな」

ぶしつけの表情に心配らしい言葉で氣遣ふのだつた。

「どこか、軀でも惡くしてゐるのじやないでせうか」

妻は駄々子に機嫌をとるやうに訊ね返す。

「いや……わからぬ」

老人は間の抜けた頃、斯う答へる。

「でも、さう惡いやうには見えませぬがね、どうしたのでせう……」

妻はまた言ふ。

「何か青葉でもあるか」
老人は起きあがらんばかりにして、妻の眼を見詰めて言ふ。
「青葉ですと何時でもありますよ」
妻は何となしにおず〳〵して答へる。
老人はこの返事を聞くと、それ以上何とも言はない。只だ自分の一人で心配しゐるだけである。妻も話さうとはしない。
老人はその翌朝、第一に勝手元に出かけて行つて青葉を鶏に與へるのだつた。

老人が外出するやうなことは滅多になかつた。家を出て行くのは大抵鶏の餌を買ひ求めるためにちよいと出る位だつた。
老人は自分の目的地までは何知らぬ顔してずん〳〵歩んで行く、途中で知り合ひの人が

「何處へお出かけですか」
と、訊ねても
「一寸、あそこまで」
と、微笑だにせず、呟くやうに返事して行のだつた。
老人は雑穀屋の店先にくると
「御覽なさい」
と、言葉をかけたまゝずん〳〵這入つて行く。勿論帽子なんかとらない。
「何にいたしませう」
小僧は愛想よく訊ねる。老人は只だ口の内で何か言つてはき〳〵と言はない。
てして呆と何かを眺めてゐる振りをしてゐる。その内に雑穀屋の主人が出て來て
「いらつしやいまし」
と、女のやうに言ふ。

「何時もだけ下さい」

老人は主人の方に頭をしやくる。

「鶏の方ですね」

主人は老人の何時もの用事を思ひ出して、斯う確める。

「……」

老人は、わかつてゐるじやないかと云つた振りをして、眼瞼一つ打たない。

「有難うございます。どうもお待たせいたしました」

暫くしてから主人は老人の前に燕麥三升と、糖五升との二つの袋を突き出す。

「一寸屆けて下さい」

老人はさう言つて、お代を拂つて歸つてくる。すると、その後からは雜穀屋の小僧が二つの袋を肩にして、トボ〳〵とついてくる。

老人は通りの警察の前の流行性感冒の注意書を、人が群つて見てゐても、見やうともせないで、人にぶつかりさうになつても、自分の思ふ通りに、ずん〳〵歸つて來るのであつた。

「レグホンはい、鶏じや」

老人はかうした思ひを、人込みの中ででも忘れないらしい。

レグホンの卵は孵化さすために、傳に依つて方々から買ひに來る人があつた。その時は老人は買ひに來た人に、卵と鶏とを見せるのであつた。然し何も自慢の意味ではない。

「大きい卵をするのですね。この雌鶏がですか？」

レグホンの卵を始めて見た人は、その鶏の割に大きい卵なので不思議さうに訊ねる。老人はレグホンの白い卵を掌に大事さうに、自分ものせて、彼獨特の顔をして鶏と見較べるのである。そして

「これはひかうから來た直ぐですからね」

と、別に得意振るのではないが、買手を呑み込んで言ふのであつた。

「この鶏にはまた別な飼方があるのでせうね、名古屋コーチンなんかとは別な」

その人は老人の飼つてゐる他の種の鶏を見て言ふ。

「別に……」

老人ははき〳〵と言はない。そしてぢろりと相手を凝視する。その人は間が悪くなつて

「食すものは何が一番い、のですか」

と、おず〳〵して訊ねる。

「何で、普通のものでよろしい」

老人は自分の家で與へてゐる餌のことは話さない。然しその次に思ひ出したやうに

「青葉だけは缺かしてはよくありませぬよ」

と、大事に注意するのだつた。

老人はどんな人が來てもレグホンの卵だけは五個以上賣らなかつた。

「この鶏は飼ひかけてから、早や三年にもなりますね」

老人は何日か人に話してゐたことがあつた。

「鶏は三年も壽命があるのですか」

脇にゐた田舍者らしい青物屋が訊ねた。

「この鶏が生きてゐるじやないか」

老人は餘程氣に觸つたらしい。

老人は雛から產卵の期までは、その日々に成長變化して行くのを樂しみにし、その後は自分がその鶏の造化者でもあるやうに、眺めては法悦に入るのであつた。

「あの老人は、鶏を子とでも間違へてゐるのだらう」

何かの時私は言つた事があつた。

「全くだ、あれだけ鶏に愛着するものは少いからね、いくら好きだからと言つても……」

「飽くことを知らないんだもの」

「それであのやうに頑固だよ」

「それでもあゝまで自分を信じ切つて何事も出來るといゝよ」

これは從兄の敏之との會話であつた。

私は意氣地ない自分が恥しくなつた。

「老人のやうに意地張つてもよい強く生きやうか」

大正十一年二月十五日印刷
大正十一年二月二十八日發行

定價四十錢

編輯者　東京府下東大久保町二三四　津島文治

發行者　東京市牛込區早稲田鶴巻町二六〇　武田義七

印刷所　東京市芝區櫻川町二〇　株式會社大高印刷所

發行所　泉會

東京市牛込區早稲田鶴巻町二六〇
電話番町四八五六番
振替東京二七四三六番
菊屋出版部

發賣元

不許複製

322
120

終